



第 007 号 2020 年 6 月 27 日 長山琢磨

### 提供するオンライン授業と受講するオンライン授業

2 月 15 日(土)と 16 日(日)の 2 日間、まだ新型コロナウイルス感染症の脅威が国内に広がる少し前、私は東京の田町にいた。以前受講した履修証明プログラム同期生が熊本大学で教員をしていて、インストラクショナルデザイン(以下、「ID」という)という聞き慣れない分野の専門家だった。ID とは「教育の悩みを解決する道具」のことである。

学校の事務職員として働くうち、大学の学部・学科を新設する手続「大学設置認可制度」の経験を積んだ。学校の仕事は基本的にルーティンで、組織新設は毎年あるわけではない。幸いにして貴重な経験を積むことができた。

経験を自分だけに閉じておくのはもったいないし、広く経験を伝えるアプローチを以前から考えていた。広義には行政手続なので、公共政策大学院も考えたが、ID を使って経験を伝える学びに挑戦したいと思った。コロナの渦中で熊本大学大学院教授システム学専攻博士前期課程を受験し、無事に合格した。オンラインなので仙台でも学べる。しかし、入学が近づくにつれ、コロナの感染が拡大した。勤務先でもオンライン授業を検討し、大急ぎで準備して体制を整えた。

職場でそのような思いをしながら、自分自身はオンラインの学びに向き合っている。学習設計をしっかりと行えば、社会人はオンラインが親和的だと気がついた。たまたま大学院に進学したタイミングで、オンライン授業の必要性を迫られた。「コロナと私」を考えるにあたり、オンライン授業を抜きに語ることはできない。慣れない学びと仕事との両立に四苦八苦しながらも、時に楽しく、時に苦しく学んでいる。

最近ではコロナ以後の社会のことがよく話題になるが、変化することを前向きに捉えて、自己変容し続けていけるよう、学びを通じた自分の背骨作りに取り組む日々である。

長山琢磨 (東北学院法人事務局課長補佐)

2020 年 6 月 24 日